

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32665
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25370416
 研究課題名(和文)チェルノブイリ原発事故を描いた文学の研究

研究課題名(英文)A study on "Chernobyl" literature

研究代表者

安元 隆子 (Yasumoto, Takako)

日本大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40249272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：チェルノブイリ原発事故がどのように描かれてきたのかを考察した。主にスベトラーナ・アレクシェービッチの『チェルノブイリの祈り』、グードルン・パウゼヴァングの『雲』、若松丈太郎の連詩「かなしみの土地」、チェルノブイリ原発事故を予見した映画としてタルコフスキー『ストーカー』を論じた。『チェルノブイリの祈り』は社会主義からの訣別と人間の生と愛への希望というテーマを証言集全体の構造を分析することで明らかにした。また、『雲』では登場人物の核に対する意識の差が主人公の父方、母方の意識の差と重なること、「かなしみの土地」では想像力の飛躍に基づく詩法を明らかにし、福島原発事故への架橋の意味があることを評価した。

研究成果の概要(英文)： I considered how the Chernobyl nuclear accident had been described. I talked about "Prayer in Chernobyl" by Svetlana Arekushebitchi, "The cloud" by Goodorn Pauzevangu, "The land of feeling sad" by Joutarou Wakamatsu, and Tarkovsky "stalker" as the movie which foresaw "Chernobyl". I understood the break from socialism and the hope of human life and love by analyzing the structure of the entire testimony in "Prayer in Chernobyl". From "The Cloud", I defined the idea about "Nuclear power" and the different attitude about it and life style that men and women had both before and after the tragedy. They have a common point in this novel. I also made known Joutarou Wakamatsu's method when he wrote poems was to look at the reality, and to make full use of his imagination. I estimated his poems meaning to be a prediction of the Fukushima nuclear accident.

研究分野：日本近代文学 比較文学

キーワード：チェルノブイリ スベトラーナ・アレクシェービッチ 若松丈太郎 タルコフスキー グードルン・パウゼヴァング

1. 研究開始当初の背景

2011年3月12日、東日本大震災の津波により、福島原子力発電所の原子炉が爆発し、放射能汚染が広まった。今なお、故郷に帰還することが出来ず、仮設住宅に暮らす人々も多い。このような事態を目の当たりにし、思い起こすのは1986年に起こったチェルノブイリ原発事故である。人類史上最悪の原発事故は世界中の人々を恐怖に陥れ、原子力に対する意識を高めたはずだった。しかし、再び福島で大きな原発事故が起きてしまった。チェルノブイリをもう少し真剣に受け止めていれば、今回の福島ももう少し違った形になったのではないかと考えずにはられない。では、世界の文学はこれまでどのようにチェルノブイリを描いてきたのだろうか。このような疑問から本研究は出発している。

2. 研究の目的

これまで世界の文学が描いてきたチェルノブイリ原発事故を検証し、人類の核エネルギーに対する意識を明らかにする。そして、そこから今後、人類がどのように核エネルギーと対峙すべきなのか、その指針を探る。

3. 研究の方法

(1) 表現に即した文学作品の読解と分析を主とする。また、作品の受容状況、作品の時代的・社会的背景といったコンテクストを勘案しながら作品の意義を考察する。

(2) 『チェルノブイリの祈り』については証言が文学に変わる時を意識し、証言の構成方法について考察する。『雲』については旧世代と新世代の思想の対立という観点を取り入れる。若松丈太郎の詩については、詩人の創作のメカニズムを明らかにし、引用された言葉や文学、そして映画を丹念に検証し、詩の深層を明らかにする。タルコフスキーの『ストーカー』については原発に酷似した映像、及び、黒い犬やストーカーの妻の果たす役割など、これまであまり注目されてこなかった部分の意味の考察を試みる。

4. 研究成果

(1) スベトラーナ・アレクシェービッチ『チェルノブイリの祈り』について

ここに集められた証言には戦争の記憶が重なっているものが多い。その多くは大祖国戦争、つまり、独ソ戦であるが、それだけではない。リクビダートルとして事故処理にあたったのはアフガン戦争から帰った兵士たちである。苛酷なアフガン戦争の実態を明らかにし、そこで戦った兵士たちが感じた、「アフガンから帰った時はこれから生きるのだと思ったが、チェルノブイリは逆に殺されるのは帰ってから」という絶望の意味の深さを明らかにした。

また、原発より30 km圏内の廃村に侵入したタジキスタン、キルギス、チェチエンからの移入者の時代的背景を明らかにし、それぞ

れの地域の内戦の様子を付加することで、これらの証言の持つ「戦争の記憶」は決して単色のものではなく、1940年代以降のソ連(ロシア)が体験したさまざまな戦争の記憶に彩られていることが明瞭になった。

また、これらの証言を元に作品内の時空間を整理すると、「死」の象徴であるチェルノブイリ原発を中心にして、時間軸としての縦軸に述べた様々な戦争が位置し、空間軸としての横軸には、生者との交流がなく生きながら死者と会話するのみの人々が住む30 km圏内がある。それは「生」と「死」が混在する地域となる。そして、その外には「生」者の住む地域があるという構造を明らかにした。

核の脅威については、「チェルノブイリ人」という言葉の誕生に象徴的であるように、核被害の症状の描写というよりも、人々のまなざしによって核の脅威と疎外感を知らされる、という点を指摘した。

ソビエト的ヒロイズムと祖国への盲信からの覚醒がこのテキストの主要テーマであることは明らかだが、このテーマは数々の証言に現れているだけではなく、このテキスト全体の構成が大きくかかわっていることを新たに指摘した。序や前書きというくくりを取らず、作者自身にインタビューするという形をとり、作者も多声の中の一つとして位置づけていることを確認し、この書が徹底した声の多層性によって成り立つものであることを明らかにした。その内容は、戦争の記憶に重なるチェルノブイリ原発の事故と、戦争から逃れてチェルノブイリにやってくる人々、人間以外の動植物にも多大な被害を及ぼしている実相、そして、人々の覚醒と次代を担うはずの子どもたちが置かれた苛酷な現状、というように多岐にわたるが、かなり意識的に配置されている。それだけでなく、最初と最後におかれた消防士の妻の物語は、事故の再現ではなく、人々の心、そして、死や愛について考えたい、という作者の想いを反映している意図的な構成であることを指摘した。事故の過酷さを訴えるだけだとすれば「余剰」にあたる部分や、テーマに対峙する「ソビエト政権擁護者」の言葉などの挿入は必要ない。しかし、事故の再現を超え、多層性を持つ物語のためにこれらをあえて導入していると考えられることが判明した。

(2) ゲードルン・パウゼヴァング『雲』について

「ヒバクシャ」差別と偏見の描写、及び「ヒバクシャ」の持つ意味について

放射能が他者にうつる、といった無知な大衆が登場する半面、遺伝子を傷つけ、子孫にまで影響を及ぼすということを理解している人物も登場している。何よりも、広島原爆とグラーフエンハインフェルトの原発事故が同じ核被害であると認識している、核について深い知識を持っている人物が登場して

いることを指摘した。

対照的・類型的な人物の造形について

保守的で厳格な父方の祖父母に対し、少々気弱で優しい父、その父をさらにリードし、積極的に社会変革に携わるのがヤンナ・ベルタの母である。その母方の祖母も物質的なものに拘泥せず、自由な精神の持ち主である。彼女は自由で情熱的な恋愛をし、「家族」にこだわらない。一方の父方の祖母は典型的な保守的な考えのおばあちゃんである。それは彼女がかつてナチスの婦人隊にいた、ということばが象徴することを指摘した。また、父方の叔母と母方の叔母も同じく対照的な描き方である。その最も象徴的な場面が被曝し脱毛したヤンナの頭部に対する考え方の差であるとした。隠すべきか隠さないべきか。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」人々に対する警告の意味を込めてヤンナは帽子をかぶらないのだが、それはチェルノブイリを経て再び福島事故をおこした人類に対する警告でもある、という意味付けをした。一方、ヤンナは大人に対して臆することなく自己を屹立させていく。幼いころからの母方の親戚の行動を見て育った結果だと考える。

母方の物語、女の物語について

上記の考察を通して、この小説は母方の物語であり、女の物語であることを指摘した。主要人物は女性であり、一部の例外を除いて男性は夭折している。ここに、作者のこれまでの男性中心社会とその価値観に対する反発、及び、新しい価値観の提唱を読みとった。

ヤンナ・ベルタを変えたもの

ヤンナに変化をもたらしたのは発毛によって知らされた「生きる」という感覚であり、「血縁を越えた家族」の存在である。ヤンナは確実に成長、変化していることは被曝者の女性にかけたことば「でも生きているでしょう」に明らかであることを指摘した。

祖父母と再会する場面の意味

反動的保守的な父方の祖父母と社会変革を目指すヤンナとの対峙を示す場面だが、これまで拒んでいた帽子を着用し、感情ではなく言葉で対峙しようとするヤンナの姿から、彼女の成長が認められることばを指摘した。

ドイツの脱原発政策を進めた背景には、エーリッヒ・フロムの『生きるということ』、ロベルト・ユンクの『原子力帝国』などの著作があることを指摘した。同時に日本の現状と比較し、大飯原発訴訟の3,4号機の運転差し止めを命じた福井地裁の判決にドイツとの相似を認めた。そして、経済第一主義から人間らしく生きることへのシフトが試されている、と結論付けた。

(3)若松丈太郎の詩について

「連詩 かなしみの土地」各篇について読解と分析を試みた。

まず、「プロローグ」では背後にあるチェルノブイリ原発事故を予言しているかのような「ヨハネ黙示録」の存在を再確認した。

同時にそこから若松は「継続するかなしみ」を強く表出していることに注目した。しかし、「百年まえの蝶」では、キエフに向かうエアバスの中で透谷の死を彷彿としているが、この点については現段階では当日が透谷の命日という以外相関関係がみつからず、更なる考察が必要である。「五月のキエフに」では、キエフの街歩きの様子が描かれているが、現実と幻のあわいを行き来する描写は、若松の詩の根本的な方法と重なることを明らかにした。また、詩中に取り上げたシェフチェンコと若松の精神が重なることも指摘した。「風景を断ち切るもの」では、背後にある映画「こうのとりのちづさんで」「ベルリン・天使の詩」との対応関係を確認し、「境」を超えることの重要な意味を訴えていることを明らかにした。「蘇生する悪霊」は冥王・プルートと赤い森を重ねて理解し、そこに「イタクハナイ」という音の重なりが有効に使われていることを指摘した。「死に身を晒す」は原発から30 km圏内の人々が生と死の両義性の中で生きていることを確認した。「神隠しされた街」では、チェルノブイリと福島の間を往還する若松の意識の運動性について分析した。そこには現実を凝視し、そして、そこから想像力によって羽ばたく意識の運動性が見られるのである。この方法が若松の他の詩にどのように用いられているのかも確認した。「囚われ人」は、子どもたちが放射能被害を受ける不条理を糾弾しているが、その表現にアレーシ・アダモビッチの『ハティニ物語』と映画『炎 628』がどのように有効に用いられているのかを考察した。また、「苦い水の流れ」は「プロローグ」と対応し、次の「白夜にねむる水惑星」に連なることを確認した。そして、「エピローグ」ではチェルノブイリを壮大な時間の流れの中で人類の悲しみとして普遍化しているということを指摘した。

若松の詩の方法と詩人の使命について

「連詩 かなしみの土地」から抽出できた若松の詩の方法は、透徹したまなざしで現実を直視し、想像力によって異空間に跳躍するものである。この方法は「みなみ風吹く日」や「連詩 霧の向こうがわとこちらがわ」などの詩の方法と重なる、若松の基盤を成すものであることを指摘した。また、この方法は福島の実況への考察にも用いられており、浜通り地方になぜ原発が林立するようになったのか、という点についても告発している。その正当性を現実的な社会状況によって裏付けし、こうした言葉を持ってこの時代の核状況を撃とうとする若松の「詩人の使命」を評価し、そこには同じ東北出身の石川啄木との共通性があることを指摘した。

(4)タルコフスキー『ストーカー』について

チェルノブイリ原発事故から福島原発事故を予見したのが若松丈太郎とすれば、チェルノブイリ原発事故をそれ以前に予見し

た者はいなかったのか。タルコフスキーは映画『ストーカー』にその予見を表現している、という見解は耳にするものの、この点についての論文はほとんどない。そこで改めて分析することにした。

『ストーカー』の原作から映画化までの道筋を辿り、作者の意図の変遷を追った。そして、そこにスリーマイル島の原発事故が影を落としている可能性があることを指摘した。その根拠はストーカーの暮らす家の近くの場面にスリーマイル島原発と同型の放熱塔が見えることである。また、「ゾーン」と呼ばれる立ち入り禁止地域と現在のチェルノブイリ原発から30km圏内の立ち入り禁止地域の様相の相似である。

ゾーンの中の「部屋」は願望がかなう部屋とされているが、登場人物のヤマアラシのエピソードから考えれば、ゾーンの奥にある部屋は人間の本性を露見させる場という見方も可能である。ここには原子力の持つ二面性、つまり、人類の希望の象徴と大量破壊兵器の可能性のあることを明らかにしている。とすれば、部屋は原子炉建屋とも考えられることを指摘した。原爆に使うのか電力として使うのか、原子力をどのように使うのかはまさにその人間の本性を表すことになる。

ゾーンから帰還した後のストーカーを受け入れる妻の態度は明らかに変化を遂げている。その変化を重視することで見えてくるのは、自ら変貌を遂げようとするストーカーの姿であることを指摘した。その端緒が末尾近くの娘を背負って歩く場面であり、弱さと柔らかさを肯定するモノローグである。この新しい価値観についてはこれまでも指摘されてきたが、こうした価値観と共に生きることを象徴しているのが、ゾーンからストーカーと共に帰還した黒い犬の存在だと考えられることを指摘した。

スリーマイル島の原発事故は少なからず、タルコフスキーに影響を与えたと考えられる。核エネルギーの使用は本然の生と関わってくる。その使用法は使用する者の本然の生を顕在化させるのだ。硬直した価値観に基づけばそれは人間にとって最悪の事態をもたらす。柔軟な感性は人々を幸福に導く。他人に対して変化することを求めるのではなく、自らも変貌する必要があると気づき、妻と娘と共に歩むストーカーの意味をわれわれは考えるべきである。スリーマイル島の事故からタルコフスキーはそのようなことを看取したのだろうが、現実では人間は過ちを繰り返す、チェルノブイリの事故が起きた。そして、また、福島にも。もう一度、我々はタルコフスキーの『ストーカー』の意味を考え直す必要があることを最後に指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

安元隆子 「チェルノブイリ原発事故を予見した映画として観るタルコフスキーの『ストーカー』」、『国際文化表現研究』、査読有、第12号、2016、pp.439-450

安元隆子 「チェルノブイリ原発事故をめぐる文学(3) 若松丈太郎詩論 現実凝視と飛躍する想像力」、『国際関係研究』、査読有、第36巻第1号、2015、pp.43-52

安元隆子 「チェルノブイリ原発事故を巡る言説(2) ゲードルン・パウゼヴァング『みえない雲』を読む」、『国際関係研究』、査読有、第35巻第1号、2014、pp.17-28

安元隆子 「スベトラーナ・アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』を読む チェルノブイリ原発事故を巡る言説(1)」、『国際文化表現研究』、査読有、第10号、2014、pp.241-258

〔学会発表〕(計 1 件)

安元隆子 「チェルノブイリ原発事故をめぐる言説 『チェルノブイリの祈り』と「神隠しされた街」」、『日本比較文学会東京支部7月例会、2013年7月20日、日本大学法文学部

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

安元隆子 沼津市立図書館文芸講座
文学で読む「チェルノブイリ」と「福島」
「チェルノブイリの描き方 映像で見る『チェルノブイリ』と『福島』」、『2015.6.13、沼津市立図書館

安元隆子 沼津市立図書館文芸講座
文学で読む「チェルノブイリ」と「福島」
「若松丈太郎『福島原発難民 南相馬市一歩人の警告 1971年～2011年』『福島核災棄民町がメルトダウンしてしまった』を読む」、『2015.5.30、沼津市立図書館

安元隆子 沼津市立図書館文芸講座
文学で読む「チェルノブイリ」と「福島」
「ゲードルン・パウゼヴァング『みえない雲』を読む」、『2015.5.23、沼津市立図書館

安元隆子 沼津市立図書館文芸講座
文学で読む「チェルノブイリ」と「福島」
「スベトラーナ・アレクシェーピッチ『チェルノブイリの祈り』を読む」 2015.5.16、沼津市立図書館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安元隆子 (YASUMOTO, Takako)
日本大学国際関係学部・教授
研究者番号： 40249272